

【今回の調査でわかったこと】

1. 曲輪Ⅰ南側斜面の上段部分は高石垣だった

石垣①の検出状況と現況地形から、曲輪Ⅰの南側斜面の上段部分は、高さ約8m～9mの高石垣だったと推定できます。同時代の山城と比較して高い石垣だったと思われます。

2. 城の正面側の石垣には大きめの築石を使用

今回の調査で検出した築石は、大手枡形虎口の石垣よりも大きいことが分かりました。また、曲輪Ⅰ北面に現存する石垣と比較してもやや大きい石を使っているようです。曲輪Ⅰの南面は城の正面側となるため、ほかの箇所より大きな石を使用したのでしょう。

3. 帯曲輪から立ち上がる石垣は腰石垣

石垣②の検出状況から帯曲輪面から立ち上げる石垣は高さ2m程度の腰巻石垣だったと推定できます。それより上部は切岸で上段の曲輪面に至ります。

曲輪Ⅰ南側斜面の下段部には高石垣を構築しなかった可能性があり、城の中枢部周辺と枡形虎口などの防壁上、重要となる箇所に集中的に石垣を使って築城したのかもしれませんが。

4. 石垣の石材が判明

築石の石材は花崗岩だけでなく、古城山で産出する堇青石ホルンフェルスを使っていたことが分かったことから、石垣の石材の一部を現地で調達していたことが明らかになりました。

5. 瓦葺建物に使用された瓦を推定（写真5）

今回の調査では大量の瓦が出土しましたが、約7割が石垣①の周辺から出土しています。石垣①の崩落した石とともに出土していることから、曲輪Ⅰにあった建物に使われた可能性があります。桔梗文を中心飾りにもつ軒平瓦と巴文軒丸瓦が建物の軒先を飾っていたのでしょう。

編集 甲賀市教育委員会
平成26年(2014年)3月9日発行
問い合わせ先 甲賀市教育委員会事務局 歴史文化財課
〒520-3393 滋賀県甲賀市甲南町野田810番地
電話：0748(86)8026 FAX：0748(86)8216



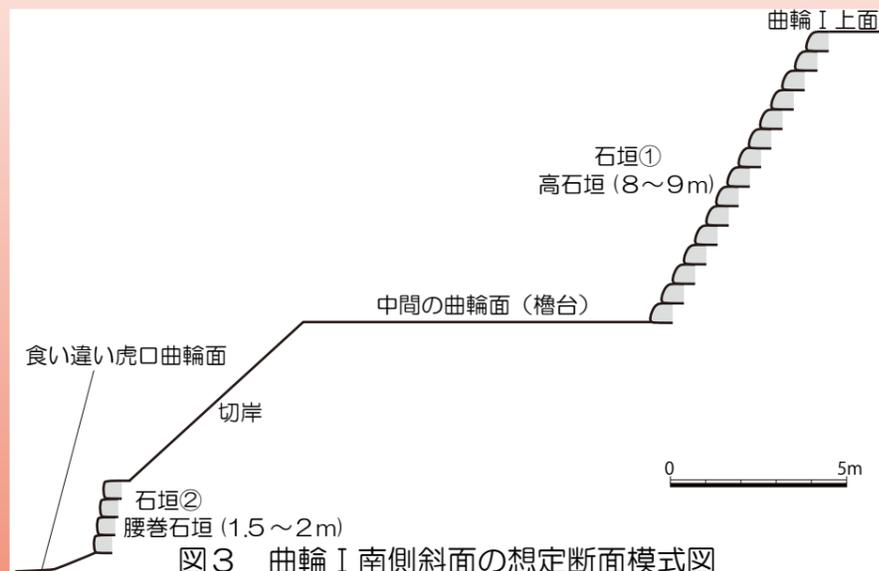
写真3 石垣②崩落状況



写真4 石垣②検出状況



写真5 出土軒瓦



【水口岡山城の概要】

水口岡山城は、豊臣秀吉による甲賀支配の拠点として天正13年(1585)に重臣である中村一氏によって築かれた城です。城主は、2代目が増田長盛、3代目が長束正家です。中村一氏が三不老、増田長盛と長束正家は豊臣家の五奉行でした。三人とも豊臣政権で重責を担う人物であり、豊臣政権において非常に重要な位置づけの城であったことが分かります。

慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いの後に廃城となり、徳川家康は水口を直轄地とします。豊臣政権の象徴であった山城は破城されてしまいます。天和2年(1682)に水口藩の成立以降は御用林となりました。

【調査の位置と目的】

今回の調査は、城の主郭部である曲輪Ⅰの南側斜面で実施しました(図1の調査区)。曲輪Ⅰの東西両端には土壇状の高まり(図1のaとb)があり、寛永期に描かれた絵図によれば、東側の土壇の位置(図1のa)を天守跡としています。

調査区は、曲輪Ⅰから約17m下に位置する食い違い虎口(図1のg)のある帯曲輪面までの斜面に設定しました。天守推定地南側斜面の状況を確認するためです。現況地表面では石垣を確認することはできませんが、石垣の裏込石とみられる栗石が数多く散乱し、石垣の存在が推定されてきました。平成24年度の第1次調査で枡形虎口(図1のf)などにおいて地中に埋もれた石垣を発見したことから、地中に石垣が埋まっている可能性が高いと想定しました。また、曲輪Ⅰと食い違い虎口のある帯曲輪との中間に平坦面があり、その様相を確認することも併せて調査の目的としました。



図1 水口岡山城跡第2次調査 調査対象地位置図 1:3,500 縄張り図は高田徹氏作成(『甲賀市史』第7巻よりを引用)

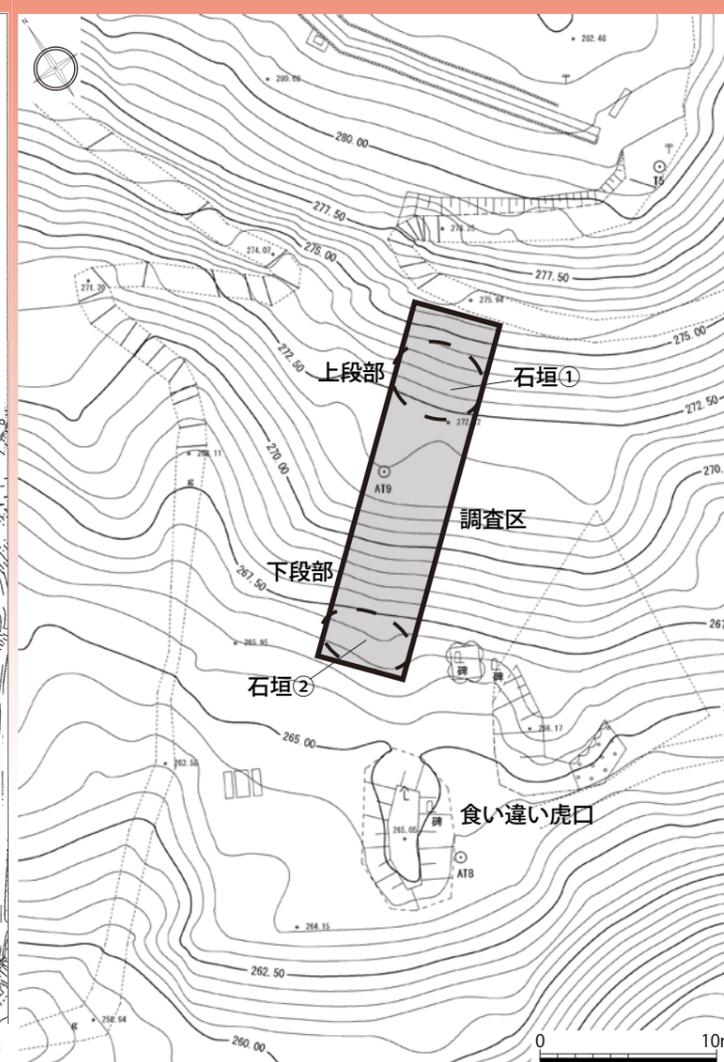


図2 調査区と石垣の検出位置 1:400 (図1の調査区周辺を拡大)

【検出遺構】

《石垣①》

調査区の上段部で検出した石垣です。石垣は破城によって崩されたため、裏込石と考えられる大量の栗石が堆積状況で出土しました(写真1)。裏込石を除去すると、石垣の表に使う大きな築石が多数確認できました(写真2)。本来の石垣はもっと斜面の奥に位置するようです。築石の大きさは80cm~100cmでした。

《石垣②》

調査区の下段部で検出した石垣です(写真3・4)。築石は3つのみで、調査区に向かって右側の部分については後世に抜き取られたとみられます。

また、検出した3つの築石は面が揃っていませんが、裏込石の検出状況と築石の下に根石となる大きめの石があることから、大きく位置が動いていないと推定できます。築石の大きさは石垣①と同じです。

石垣②は、石垣の基底部から約1.5mの高さまでしか裏込石が確認できません。このことから、石垣②は高石垣ではなく、帯曲輪面から2mほどの腰巻石垣で、石垣の上面から上段の曲輪面までは切岸であったと考えられます(図3)。



写真1 石垣①栗石堆積状況



写真2 石垣①築石崩落状況